

北の海鳥

十八号



『北の海鳥』十八号
令和6年3月12日
北海道海鳥保全研究会
稚内市緑5-27-8



エトロフウミスズメ 2023年3月8日 納沙布岬沖 石橋 隼

目次

1. 北海道周辺の海鳥繁殖地		
・海鳥調査の魅力	長谷部 真	2
2. 北海道沖の海鳥		
・納沙布岬で観察したエトロフウミスズメの大移動	石橋 隼	8
・襟裳岬からの海鳥観察	及川 樹也	12
・勇払クルーズで見られる冬期のウミスズメ類	南波 興之	18
・フェリー非就航期の天売航路における海鳥の観察	矢萩 樹	24
記録		

1.北海道周辺の海鳥繁殖地

海鳥調査の魅力 当会代表 長谷部真

海鳥観察

海鳥は野鳥の観察の世界で他の分野，例えばガンカモ，シギチ，ワシタカ類などを網羅した人が最後に行きつく場所とされています。カモメ類など港や海岸，一部内陸で観察可能な種もいますが，沖や主に離島にある繁殖地に行かないと観察することが難しい海鳥が多くいます。

海鳥を最も手軽に観察できるのが港です。主にカモメ類が観察できます（例：矢萩 2023）。海が荒れた時は普段沖合でしか見られない海鳥を観察できることがあります（例：三ツ橋・三ツ橋 2023）。岬や海峡に面した海岸などの陸上から，海鳥の渡りの通り道となっている沖合を望遠鏡で観察する方法もあります（例：本誌 及川氏 記事）。観察地点から海鳥までの距離が遠いことが多いので，上級者向きと言える方法です。

一部の海鳥は海岸沿いの崖で繁殖していますが，それ以外のほとんどの種は海上で過ごしていることが多いため，これらの種を観察するためには船に乗り海に出て行くしかありません。各地を就航している定期航路上から海鳥を観察するのが最も手軽な方法です（例：先崎 2022）。甲板の右舷左舷のいずれかから海鳥を観察します。ただし，途中に海鳥を発見しても当然のことながら船は止まったりゆっくり走ることはありません。大型船の場合は甲板が高い位置にあるために，海鳥までの距離が遠い難点があります（写真 1）。反対に，小型の高速船は速すぎて海鳥の観察に向きません。



写真 1 稚内礼文島を結ぶフェリー 海鳥を観察できる甲板は3階くらいの位置にある

もっと近くから海鳥を見たい人のために海鳥や海棲哺乳類の観察を目的としたクルーズ船が，根室や知床半島などから就航しています（例：本誌 石橋氏 記事）。乗船料は安くはないですが，海鳥を探して近づいてくれるため，じっくり観察したい人に向いています。海鳥観察が主目的ではないですが，紋別・網走港から就航する流水観光船からも海鳥を観察することができます（例：城石 2022）。クルーズ船のない海域では船を貸し切ったの観察が唯一の方法です。貸し切り船による調査の最大の魅力は自分の好きな海域に行き，近くから海鳥を観察できる点です（例：南波 2018）。ただし，そのような船を自分で探し，船長と値段交渉をする必要があります。

北海道で繁殖する海鳥を見たい場合，離島に行くのが一般的な方法です。北海道で定期航路があり海鳥が観察できる主な島は天売島です（写真 2）。ここでは陸上の崖から海鳥の巣を，繁殖期の夜にはウトウの帰巣を観察でき，近くから観察したい人向けにクルーズ船も運航しています。



写真2 天売島の海鳥が繁殖する崖

航路調査

海鳥の観察による記録にとどまらず、個体数や繁殖状況などの客観的情報を調べることは海鳥の保全にとって重要です。誰でも気軽できる海鳥調査は航路調査です。北海道には離島を結ぶ利礼航路、天売焼尻航路（写真3）、奥尻航路、苫小牧・函館・室蘭から青森を結ぶ近距離航路があります。航路調査はいつも同じ航路を通るので繰り返し行う調査に向いています。同じように見える海が季節・風向き・波・日・時間により絶えず大きく変化し、どんな海鳥が出てくる予測できないことが魅力で、渡りの季節には陸鳥が出ることもあります。回数を重ねれば面白い結果が出るでしょう。私が天売島で海鳥調査をしていたときは、羽幌から天売を行き来する間に航路調査をしていましたので、その結果はいずれまとめたいと考えています。

貸し切り船による航路調査もあります（例：長谷部 2018, 写真4）。船が小さいですが、船首から調査できるので海鳥から近く、視野が広がります。航路は船長の合意が得られれば自由に設定可能になります。小型船のため波に弱く、少し時化るとすぐに波しぶきがかかります。風が出ると夏でも寒く特に冬の寒さの克服が課題です。冬は凧の日を選び全身最大限暖かい格

好をしても寒く、双眼鏡と確認用のカメラを使用するために、指だけは操作可能なように薄着にせざるを得ません。時には7時間船の上にいることもあります。それでも普段行けない海域での初めての調査はわくわくしますし、珍しい海鳥が出ると寒さはふっとびます。



写真3 羽幌・焼尻島・天売島を結ぶフェリー



写真4 小型船を利用した航路調査（猿払沖 2018/5/18）

繁殖地調査

海鳥をより深く知るための最も基本的な調査は繁殖調査です。ウミウなど崖で繁殖する海鳥は離島でなくても繁殖している場合があります（例：矢萩 2017）、海岸から見える海から突き出た岩峰で繁殖していることもあります（例：先崎 2018）。またオオ

セグロカモメは港の消波ブロックや屋根の上で繁殖していることがあるため(例：矢萩 2020)，このような環境では離島に行かなくても調査ができます。これらの例を除くと基本的に海鳥は陸上動物からの補食を避けるため通常離島で集団繁殖しています(写真 5)。この集団繁殖が海鳥の最大の魅力と言えます。なぜなら陸生鳥類の多くは散らばって見えにくい場所で繁殖しているので全容を把握することは難しいですが、海鳥の場合、陸上動物が近づけない離島では、開けた場所で繁殖していたり、巣穴が密集していたりするので、個体数や巣を数えたり、巣に近づくことができれば捕獲するなどして詳しい繁殖状況を調査することが容易になるからです。



写真 5 ウミネコ集団繁殖地 天売島
2009/5/27

海鳥の繁殖環境は様々です。北海道の海鳥の自然の主な繁殖環境は大きく分けて地上の斜面・岩場などの人間などの四つ足動物の捕食者が到達可能な場所または、地上の崖や海から突き出た岩の上などの到達不能な場所、例外的に樹上があります(表 1)。地上には巣穴がある場合とない場合があります。主に崖以外の開けた場所で繁殖するウミネコやオオセグロカモメは営巣場所を訪れて調査することができます

(例：風間 2017)。夜行性になるのは昼間の捕食者(オオセグロカモメ・ハシブトガラス等)を避けることが目的で、ウトウ、コシジロウミツバメなどがこれに当たり、崖以外の場所で巣穴を利用するので、帰巢したところを捕まえての調査がされています(例：大門 2017)。ウミウ、ウミガラス、ケイマフリなどの崖を利用する昼行性の海鳥は目視観察が基本的な調査方法になります(例：長谷部 2015)。崖を利用し、巣穴があり、夜行性のウミスズメは崖地での巣穴調査や夜間海上調査に限られます(写真 6)。マダラウミスズメは例外的に陸鳥と同様に内陸の樹上を利用し、集団繁殖もしないため、繁殖地の特定が困難なため近年繁殖情報がありません。



写真 6 崖地でのウミスズメ巣穴調査(許可を取って実施 天売島 2013/5/8)

北海道の海鳥の主要繁殖地の離島で定期船が就航している島は天売島・利尻島しかありません。残りの離島は無人島がほとんどですので、調査に行くだけで船の手配が必須となり、海況に合わせた調査しかできないという制限がつきものです。また船の手配には船主との交渉が必須ですし、備船料は数万円と高額のため費用を賄うために大学の研究や団体での助成金を頼ることが普通で、場所によっては調査許可が必要なものもあるため、個人で行うのは難しいで

す。天売島や礼文島などの定期航路がある島でも調査地や近くの小島に行くことや海鳥の繁殖状況を調べるのに船が必要な場合もあります（例：長谷部 2015, 写真 7）。このため、離島で海鳥調査を実施する際の

障害はかなり多いです。離島で海鳥調査をするのに一番簡単な方法は北海道（一部青森）に海鳥研究室を持つ大学、北海道大学、早稲田大学、東洋大学など、に入学し海鳥研究室に所属することです。

表 1 北海道の海鳥種ごとの主な繁殖環境（地上・樹上，四つ足動物の到達可能の有無，巣穴の有無）と繁殖地における行動時間（昼行性・夜行性）

行動時間	地上 到達可能		地上 到達不能		樹上
	巣穴あり	巣穴なし	巣穴あり	巣穴なし	
昼行性	エトピリカ	ウミネコ オオセグロカモメ	ケイマフリ	ウミガラス ウミウ ヒメウ チシマウガラス	
夜行性	オオミズナギドリ コシジロウミツバメ ウトウ		ウミスズメ		マダラウミスズメ



写真 7 雄冬岬周辺における海上海鳥調査
2011/6/6

海鳥調査の魅力

海鳥調査をする際には鳥類の観察能力だけでなく、海の天候判断，船に強いこと，斜面や岩場を登る際の登山能力，無人島の場合はキャンプ能力など総合力が問われます（写真 8）。こんな話をするると大変な海鳥調査に挑戦しようとはとても思えないかもしれませんが，これが海鳥調査の醍醐味ではないかと思えます。海鳥繁殖地自体が離島にあるため，高山のように普通の人への到達し難い，日常とは異なる世界に浸るこ

とができます（写真 9）。有人島であっても離島独特の本土とは違う空気が流れており，調査地も観光地でなければ基本的に人はいないので，独立した世界に入れます。特に無人島の場合は誰もいないので，島丸ごと独占？した気分になれます（写真 10）。貸し切り船に乗ればそれ自体特別な体験となります。離島での調査は天候判断を誤ると牙をむく厳しい環境になりますが，穏やかであれば青い海と広い空が迎えてくれます。海鳥は研究している人自体が少なくわかっていないことが多いため，主要ではない島やあまり研究されていない海鳥の調査を行うと，他の追従を許さない，言い換えると他に研究している人がいないので，すぐにその分野の有力人物になれます。



写真8 無人島でのキャンプ 礼文島トド島 2017/6/12



写真9 礼文島トド島から見た礼文島 (2016/7/11)



写真10 礼文島トド島からの調査 (2015/7/19)

自分も何も知らなかった天売島の海鳥に魅せられた一人であり、時には揺れる小舟

にしがみつぎながら、波が被るウミガラスの繁殖地がある海岸を目指しました。また時にはカヌーで波を見計らいながら岩礁に上陸し一日中ケイマフリを観察し、またウミスズメを求めて夜の海岸を歩きまわったこともありました。海鳥との関わりはこの会報誌くらいしかない今でも、機会があればまた海鳥調査をしたいと思っています。北海道の海鳥の世界でも世代交代が見られ、かつて一緒に海鳥調査をしていた仲間が各地で学生を連れて海鳥研究を続けています。そして、もっと多くの鳥類関係者に海鳥の魅力を知ってもらい、調査の成果を海鳥の基礎研究や保全に生かしていただきたいと思います。

引用文献

- 大門純平 2017. 活動報告・海驢(とど)島海鳥調査2017. 北の海鳥5: 2-9.
- 風間健太郎 2017. GPS データロガーを用いたウミネコの採餌場所調査. 北の海鳥5: 18-21.
- 城石一徹 2022 網走市・小清水町のオホーツク海沿岸部でハシブトウミガラスの大移動を観察. 北の海鳥14: 2-5.
- 先崎理之 2018. 北海道の海鳥繁殖地・神恵内村, 窓岩のケイマフリ. 北の海鳥6: 2-3.
- 先崎理之 2022. 夏から秋の八苦航路1~海洋熱波と南方系海鳥. 北の海鳥15: 2-5.
- 南波興之 2018. 勇払クルーズにおけるマダラウミスズメの観察記録. 北の海鳥7: 6-13.
- 長谷部真 2015. 礼文島海鳥調査・礼文島海鳥調査1回目. 北の海鳥1: 1-3.
- 長谷部真 2018. 稚咲内海鳥調査. 北の海鳥7: 20-27.
- 三ツ橋薫・三ツ橋圭. 2023. 大荒れの宗谷岬. 北の海鳥17: 18-21.

矢萩樹 2017. 北海道周辺の海鳥繁殖地・釧路の海鳥. 北の海鳥 4: 2-5.
矢萩樹 2020. 北海道の海鳥繁殖地・ゴムの巣, 港にあり. 北の海鳥 11: 22-

27.
矢萩樹 2023. 釧路市における海鳥類の観察記録③ カモメ類. 北の海鳥 16: 18-22.

2.北海道沖の海鳥

納沙布岬で観察したエトロフウミスズメの大移動

石橋 隼 東京農業大学生物産業学部

エトロフウミスズメ *Aethia cristatella* は、腹部を含めた全身が暗色な唯一の小型ウミスズメ類で、ベーリング海とオホーツク海、それらに隣接した北太平洋に分布します(千嶋 2014)。繁殖地は、千島列島、サハリン、オホーツク海北部、コマンドル諸島、チュコト半島南東岸、アリューシャン列島、プリビロフ諸島、セントローレンス島、ベーリング海峡などであり、冬は大部分が流水の南側へ移動しますが、一部はオホーツク海の氷が密集した海域で越冬します(千嶋 2014)。国内では、北海道周辺が主な越冬海域であり、道東太平洋側は一大越冬地です(千嶋 2014)。

筆者は友人と2023年3月8日および9日に、北海道根室市の納沙布岬付近で、エトロフウミスズメの群れが大移動している様子を観察したため、本稿にて報告致します。

筆者らは3月8日にウミスズメ類の観察のため、「北方領土を間近に望む本土最東端パノラマ・クルーズ」に乗船しました。このクルーズは、歯舞漁港を出港し、納沙布岬・貝殻島灯台中間点まで航行する、約2時間を一日2回就航する遊覧船です(歯舞漁協 オンライン)。当初は午後便に乗船する予定でしたが、天候と波の影響で午前9時発の便に乗船しました。当日は濃霧による視界不良に加え、波の高さが1.5mほどで、やや観察には不向きな天候でした。出港から10分ほどでケイマフリ *Cephus carbo* が少しずつ姿を現す中、9時40分頃に濃霧の中を小型ウミスズメ類の大きな群れが移動しているのを確認し

ました。最初は種を識別できませんでしたが、着水していた50羽ほどの群れに、種を識別できる距離まで船を接近させることができ、その全ての個体がエトロフウミスズメであることが分かりました。その後も、数分おきに本種の大きな群れが通過する姿を確認しました。しかしながら、霧の中から一瞬姿を現しては消えるため、時間をかけて観察をすることはできませんでした(写真1)。クルーズ船の船長曰く、「レーダーには大きな塊が映っている」と仰っていたことから、かなり大きな群れが付近にいたと考えられます。貝殻島灯台中間ライン付近では、本種の着水した群れをいくつも確認することができ、船が近づくと水面を蹴って飛び立っていきました(写真2)。2時間のクルーズ中、濃霧の中から突然現れる本種の群れを数えられる状況ではなかったのですが、1,200羽以上を確認できたと思います。なお、この日に確認したその他のウミスズメ類は、ケイマフリ48羽、ウトウ *Cerorhinca monocerata* 1羽でした。午後には納沙布岬へ移動し、岬から海鳥を観察しましたが、残念ながら濃霧で何も見えませんでした。



写真1 クルーズ船で観察した霧の中のエトロフウミスズメの群れ(2023年3月8日撮影)

翌日の3月9日は快晴でしたが、クルーズ船は波が高く欠航になってしまいました。そのため、納沙布岬で8時45分から11時20分まで海鳥の観察を行いました。観察

開始直後から、エトロフウミスズメの 100 羽から 300 羽前後を中心とする群れが、約 1 分おきの頻度で途切れることなく、根室海峡を太平洋側（南側）から国後島側（北側）へ移動していました（写真3）。本種のほとんどの群れは、納沙布岬と貝殻島灯台の間を通過しており、貝殻島灯台と歯舞群島の間を通過する群れは非常に少なかったです。また、観察したどの群れも水面のすぐ上を移動していました。稀に移動していた群れの中でも、水しぶきを上げて一斉に着水する姿を確認することもできました。観察中は、常に視界に本種の群れがみられ、150 羽から 300 羽ほどの群れが数箇所に着水している姿を確認しました（写真4）。また、10 羽程度の小群の中には、納沙布岬の岸近くを通過する群れもありました。観察中に、北側から南側へ移動する群れを確認したのは 1 例のみであったことから、ほとんどの群れが北へ向かって移動していたと考えられます。観察を終えた 11 時 20 分頃でも、群れの移動は途切れることなく流れ続けていました。本種の群れは、密集して高速で移動していたため、正確な個体数を数えることはできませんでしたが、15,000 羽程度いたと考えられます。なお、当日確認したその他のウミスズメ類は、コウミスズメ *A. pusilla* 3 羽、ケイマフリ 400 羽程度、ウミバト *C. columba* 9 羽、ウミガラス *Uria aalge* 3 羽、ウトウ 35 羽でした。



写真2 クルーズ船で観察したエトロフウミスズメ（2023年3月8日撮影）

筆者は、なぜ 3 月 8 日および 9 日に納沙布岬付近で本種の大移動が確認されたのか、海水の状況を調べてみました（第一管区海上保安本部 オンライン）。すると、納沙布岬付近では、3 月 6 日まで海水が多く、根室海峡を塞いでいましたが、3 月 9 日以降の納沙布岬付近の根室海峡は、海水により塞がれていないことが確認されていました。本種は海水辺縁部を好むとされており、分布や渡来数は流氷に大きく左右されるとされています（千嶋 2014）。以上より、3 月 8 日および 9 日に、納沙布岬付近で本種の大群れが確認されたのは、海水が納沙布岬よりも北の海域へ後退したことにより、北上した海水辺縁部を求めて根室海峡を北上していたためであると考えられます。筆者らは、3 月 8 日および 9 日の 2 日間しか納沙布岬付近で観察しませんでした。3 月 12 日にも同クルーズ船の航路上で、約 2,000 羽の本種の群れが確認されました（品田 済 私信）。なお、12 日には着水している大きな群れは確認できず、数羽が単独で着水していたとのことでした。また、12 日の群れは、筆者らが観察を行った 8 日および 9 日より規模は小さかったようです。以上より、本種の群れは 12 日には個体数が減少していたものの、少なくとも 5 日間は納沙布岬付近で確認されていたことから、この海域は大規模な移動経路に位置すると考えられます。

過去の記録では、1994 年 2 月 27 日に釧路・十勝沖で 20,000 羽以上の大群が観察されたとされていますが、近年は多いときでも 1,000 羽程度とされています（千嶋 2014）。以上より、本記録は近年の北海道における本種の観察記録の中では、特に大きな群れの記録であると考えられます。

今回、筆者らがエトロフウミスズメの大移動を観察できたのは、海水の後退と本種の移動するタイミングが合致したことによ

ると考えています。3月8日は濃霧の影響により、本種の群れの規模は確認できませんでしたが、鳥との距離が近く、いつ群れが現れるか分からないドキドキ感がとても楽しかったです。また、9日には観察され

た本種の群れが次々と沖を流れ続ける光景は壮観であり、国内で観察できる場所を発見したことに感動しました。このようなタイミングで観察する機会に恵まれたことは、大変貴重な機会であったと思います。

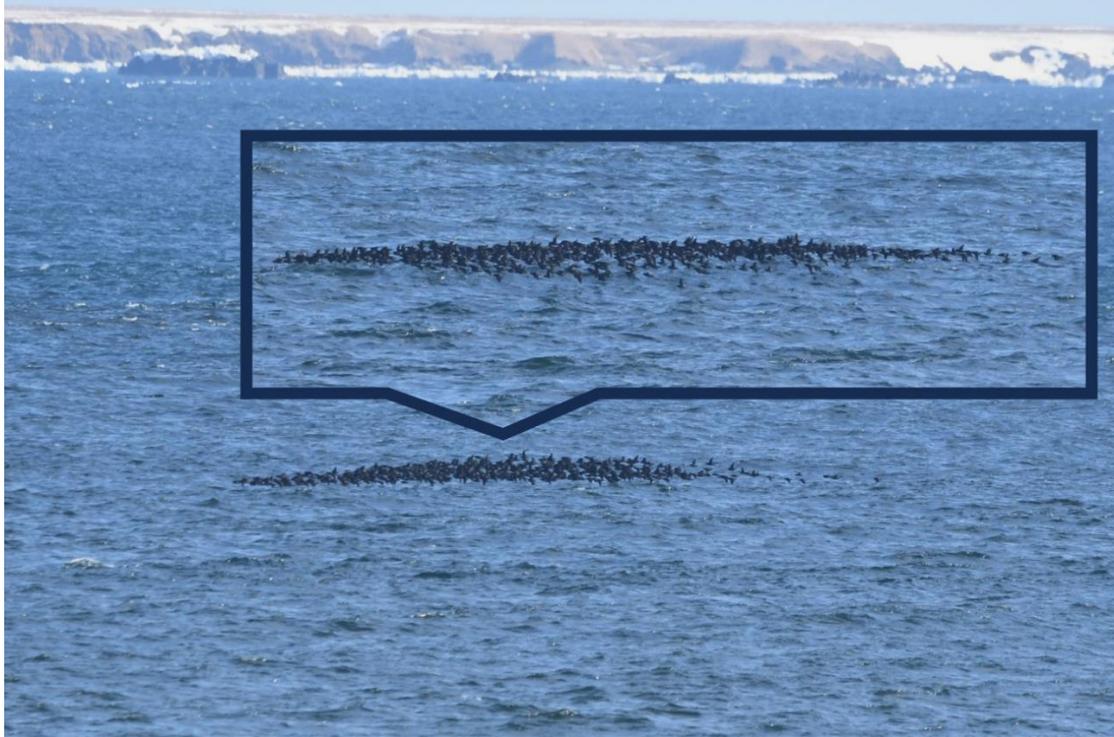


写真3 納沙布岬で観察した約300羽のエトロフウミスズメの群れ（2023年3月9日撮影）



写真4 納沙布岬で観察した着水するエトロフウミスズメの群れ（下）と北上する群れ（上）（2023年3月9日撮影）

本稿をとりまとめるにあたり，貴重な文献を提供頂いた城石一徹氏，一緒に観察をした久野太熙氏，3月12日の貴重な記録をご提供頂いた品田 濟氏のお三方には，深く感謝申し上げます。

引用文献

千嶋 淳 (2014) 北海道の海鳥 2 ウミスズメ類②，アホウドリ類．NPO 法人日本野鳥の会十勝支部，帯広。

第一管区海上保安本部．海氷情報センター 2023年3月の海氷速報（オンライン），https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KAN1/drift_ice/ice_chart/calendar/2023/03.html．参照日：2023年12月28日。

歯舞漁協．遊覧船（オンライン），<https://www.jf-habomai.jp/yuransen.html>．参照日：2023年12月28日。

襟裳岬からの海鳥観察

及川樹也（帯広畜産大学3年）

襟裳岬は北海道の最南端でも最北端でもない、一見パツとしない岬の一つかもしれない。しかし、今一度地図を見て襟裳岬の地理的条件を確認して欲しい。太平洋へと大きく突き出した地形が魅力的ではないだろうか、..、？

私はそんな襟裳岬で2021年12月から海鳥観察を開始し、これまで海鳥以外も合わせると150種以上観察してきた。短い観察期間ではあるが、これまでの観察で分かった襟裳岬の海鳥について、各季節の傾向を解説した後、筆者のフィールドノートから実際に観察した記録、特にカウントに精力的に取り組んだ2023年度の観察記録を中心に、いくつか例をご紹介します（表1）。

・各季節の傾向

4-5月

4月上旬の観察では、ウトウ、ハシブトウミガラス等のウミスズメ類と、カモ類の移動が観察された（例：2022/4/3）。4-5月の観察ではカモ類の渡りもよく見られ（例：2023/4/23）、岬の西側から東側へと移動していく様子が見られる。

GWに行った観察では、ハシボソミズナギドリ、シロエリオオハム、オオハム、ウミスズメを中心に海鳥の移動が観察できた（例：2023/5/7）。ハシボソミズナギドリは西側の海域を川のように流れる様子を観察できるが、距離は遠く、厳密にはハイイロミズナギドリが混ざっている可能性が十分ある。アビ類は水面から70-150mほどの高さを北西方向から飛んできて、南東

方向へ向かって飛翔する個体が多いが（写真1）、頭上を通過していく個体や、肉眼で見えないような高空を北東へ進み日高山脈へ向かって移動していく個体も見られた。2023年のGW期間中に数日行った観察では、数は少ないもののハシジロアビ、アビ、コアホウドリなども観察された。

5月中旬の観察でもハシボソミズナギドリ、アビ類の移動が見られ、ウトウも数十羽の群れで移動する様子が見られた（例：2023/5/14）。

5月下旬はアホウドリ類の観察適期のようで、特に西風が強く吹いたタイミングでクロアシアホウドリ、コアホウドリが多数みられた（例：2023/5/27）。アホウドリも少数見られたが、いずれも若い個体であった。若いアビ類の渡りもダラダラと続き、GWよりもオオハムの割合が増える傾向にあった。海況や風によってはイルカ類、ユリカモメ、ミツユビカモメの群れ、ハシジロアビも見られた。

6-9月

ウミネコ、オオセグロカモメが多数みられ（例：2023/6/17）、常に鳥がいる印象だ。ただし、海霧の影響で観察できない時間帯も多く、十分に観察を行えない日も多い。ウトウは、5月には飛翔して移動する個体が多いのに対して、6~7月には潜水を繰り返して採餌する個体が目につくようになる（例：2023/7/8）。ウトウの群れに混ざって、もしくは単独でハシブトウミガラス、ウミガラス、エトピリカ、ツノメドリ、ウミバトが見られることもある。8月に入るとウミスズメ類の多くは減少するが、カンムリウミスズメが見られた（例：2023/8/11）。



写真1 南東に向かって飛ぶシロエリオオハムとオオハムの群れ(2023年5月27日)

ウミスズメ類とは対照的に、季節の進行とともにみられる個体数が増加するのがオオミズナギドリだ。特に9月下旬になると風がほとんど吹いていないような条件下でも10000羽/1h程度のペースで沖合を通過していることもあり(例：2023/9/6, 24), トウゾクカモメ類やコアホウドリ, クロアシアホウドリが混ざることもある。6-9月はオオトウゾクカモメや若いアビ類が見られることもあり、楽しい季節だ。

10-11月

オオミズナギドリを中心に10000~15000羽/1h程度のペースで沖合を移動する様子が頻繁に見られ(例：2023/10/15), ハイイロミズナギドリが混ざることもあった。狙い目は早朝で、風が弱くても陸地のそばを移動する様子が

見られる。西風が強くない日は9時頃を過ぎると群れが沖合へと移動し、観察が厳しくなる印象だ。ミナミオナガミズナギドリが観察される可能性があると思われるが、筆者は見たことがない。

南寄りの風が強く吹き、天気が荒れたタイミングではミツユビカモメ, アカアシミツユビカモメ, ハジロミズナギドリ, アホウドリ類, トウゾクカモメ類, ウミツバメ類等を観察できる可能性がある(例：2022/10/10)。

この時期はカモメ類の渡りも見どころの一つで、特に早朝はセグロカモメ, オオセグロカモメが渡っていく様子を見ることが出来る。また、海鳥ではないが、シジュウカラガンやハクガン, オオハクチョウが渡る様子も見られる。

11月の西風が強く吹いた日にアホウド

リヤアカアシミツユビカモメの観察例がある。

12-3月

クロガモ、ウミアイサ、ヒメウの移動が見られるが、ウミスズメ類は少ない。シノリガモは岬周辺の岩礁地帯で見られる。丁寧に沖を見ているとケイマフリ(例：2022/2/6)，ウミバト(例：2023/12/25)などが見られることがある。また、日没前後に見られるヒメウの墾入りがなかなか壮観である。

まとめ

以上が、襟裳岬から見られる海鳥の1年間の流れだ。季節や気象条件を選べば、1日で数万羽規模の海鳥を観察可能であり、魅力的な海鳥観察地であると言えるだろう。ただし、襟裳岬での海鳥観察はまだまだマイナーだと感じる。今後この記事をきっかけに、これまで以上に、様々な季節・気象条件で海鳥観察が行われ、襟裳岬の海鳥についての知見が蓄積されることに期待したい。

表 1. 襟裳岬における水鳥・海鳥の観察記録

日付	2022/4/3	2023/4/23	2023/5/7	2023/5/14	2023/5/27	2023/6/17	2023/7/8	2023/8/11	2022/9/6	2023/9/24	2022/10/10	2023/10/15	2023/12/25	2022/2/6
観察時間	6:30-8:30	7:20-9:00	8:30-12:30	7:00-10:00	7:00-9:30	8:45-12:00	8:15-10:00	6:25-7:40	8:00-9:00	6:00-8:00	9:00-12:00	6:00-9:00	7:30-9:30	8:00-14:00
天候	晴	晴	晴	曇	晴	晴	曇	晴	曇	晴	雨・南風強	晴	晴	晴
ヒドリガモ	32													
マガモ	6													
スズガモ	25													
クロガモ	76	142	30	12	2							149	67	50
ピロードキンクロ	16	6												4
シノリガモ	10		45	45	1				2				85	70
ホオジロガモ													3	
ウミアイサ	48	8	2	3								3	2	
アカエリカイツブリ	48	2	9	10	2								25	2
カンムリカイツブリ	2												1	
ミミカイツブリ	2		2										19	1
アビ	2		12	25	2								11	
オオハム	6		4	255	350			2						4
シロエリオオハム			560	615	200									
ハシジロアビ	8				2									
アビ類		55												
コアホウドリ					450				1		14-17/5min			
クロアシアホウドリ					50		1	3			8			
アホウドリ					2									
フルマカモメ											5			
ハジロミズナギドリ											9			
オオミズナギドリ							106	1929	10224	19152	213-268/5min	28224		
ハイイロミズナギドリ					350			178			2			
ハンボソミズナギドリ			233400	8520										
黒色ミズナギドリ類 ¹								1127						

表 1. 襟裳岬における水鳥・海鳥の観察記録（続き）

日付	2022/4/3	2023/4/23	2023/5/7	2023/5/14	2023/5/27	2023/6/17	2023/7/8	2023/8/11	2022/9/6	2023/9/24	2022/10/10	2023/10/15	2023/12/25	2022/2/6
観察時間	6:30-8:30	7:20-9:00	8:30-12:30	7:00-10:00	7:00-9:30	8:45-12:00	8:15-10:00	6:25-7:40	8:00-9:00	6:00-8:00	9:00-12:00	6:00-9:00	7:30-9:30	8:00-14:00
天候	晴	晴	晴	曇	晴	晴	曇	晴	曇	晴	雨・南風強	晴	晴	晴
アカアシミズナギドリ					1									
コシジロウミツバメ											12-27/5min			
ハイイロウミツバメ											22-45/5min			
ヒメウ		16	160	35	25	18		3				1	13	10
ウミウ		12	25	50	60	51	26	9	30			123	2	10
ミツユビカモメ					150						75			
アカアシミツユビカモメ					1						12			
ユリカモメ		45	33		120							60		
カモメ		150	150	2										
ウミネコ			10	30	220	402	671	488	50	318		240		
セグロカモメ		28	10	1						20		178		
オオセグロカモメ		70	130	150	180	326	150	30	30	56		316		
オオトウゾクカモメ								1						
トウゾクカモメ								1						
クロトウゾクカモメ					4				1					
トウゾクカモメ類 ²											39-48/5min			
ハシブトウミガラス	85				3	1								
ウミガラス				1										
ウミバト													1	
ケイマフリ														1
ウミスズメ	29	4	1360	2										
カンムリウミスズメ								5						
ウミオウム	17													
ウトウ	644	54	144	795	270	3	285	1						

*1 ハシボソミズナギドリまたはハイイロミズナギドリ *2 トウゾクカモメまたはクロトウゾクカモメ

勇払クルーズで見られる冬期のウミスズメ類 南波興之

厳冬の海へ出る

私は、2009年から2013年まで、勇払沖で船を出して海鳥の観察活動を行っていました。この間に出船した回数は35回を数え、その一部を本誌でも紹介しています（南波 2018, 2019a, b, 2020, 2022）。今回は、そのうち6回行った冬の勇払クルーズについてまとめたいと思います。勇払クルーズは、12月から翌年の3月までが冬期シーズンです。冬期の海鳥ウォッチングは風が強く、船は揺れ、耐え難い寒さに身を置きながらの、過酷の一言に尽きるものです。これで面白い鳥に出会わなければ、ただ体力と好奇心を無駄に消耗して徒労に終わってしまいます。それでも、私たちは海に出るのです。そこには地上では見られないめくるめく海鳥の世界が広がっているはずですから。

私たちが目指すものは、ウミスズメ類でした。この時期は、ウミバトやウミガラスも観察することができ、それはそれで楽しいのですが、やはり海鳥の中でもウォッチング難易度の高いコウミスズメ、エトロフウミスズメやマダラウミスズメ（南波 2018）のような小型のウミスズメ類が、私たちを過酷なクルージングに6回も駆り立てる目的種でした（表1）。さらに、哺乳類は、沿岸域に定住していると考えられるネズミイルカの他にイシイルカやオットセイも見ることができました。

コウミスズメと追いかけて

コウミスズメは、冬の勇払沖には相当数生息していると思われ、6回の冬期海鳥ウォッチングに毎回出現しました。しかし、彼らは海鳥の中でも最小クラスであるため、

間近でじっくり観察するのに苦労します。そのため、私たちは海面に浮かぶコウミスズメを一生懸命探して、見つけたら近づいて観察するということがほとんどできませんでした。その代わりに、船をただ走らせていると、海面から白黒の小さな海鳥たちが飛んで逃げるため、その逃げ行く姿からコウミスズメを見つけることができました。まるで草むらを歩いているときに、不意に飛び出すバツタのようだったので、私たちはコウミスズメを“トノサマバツタ”と呼んでいました。飛び出したトノサマバツタの着地ポイントにわくわくしながらもゆっくり忍び寄り寄る子供のように、私たちは逃げていく群の中で着水した個体を確認し、ゆっくりアプローチして観察、撮影に臨みました。ただ、トノサマバツタがバツタの中ではかなり大きい部類であるのに対し、勇払の海にいる“トノサマバツタ”は、ウミスズメ類では最小サイズであるため、着水の確認も簡単ではありませんでした。また、ウミスズメ類は、飛ばずに潜水してどこか別の場所へ逃げる行動をすることから、出てくるポイントを予想して少し船を移動させ、運が良ければ船の間近に出てくる可能性があります。コウミスズメも同様の対応を取るには取るのですが、なかなか思い通りにいくものではありません。つまり、コウミスズメは冬にかなりの頻度で出現する鳥でありながら、接近が難しく満足に観察できない鳥なのです。このように四苦八苦しながらも、双眼鏡であの独特な白目を見たときは、感動しました（写真1）。コウミスズメは沿岸域よりももう少し沖に出たところで出現が始まります。冬の海でいわゆる水深100mライン（南波 2019a）に到達する前から観察が可能です。

表1 冬期の勇払クルーズの鳥類と哺乳類の観察記録

鳥類	2010/2/21	2011/1/15	2011/2/20	2011/12/17	2012/2/19	2013/3/17
アビ						○
オオハム	○	○			○	
シロエリオオハム		○		○		
アカエリカイツブリ	○				○	○
コアホウドリ		○	○			
ハシボソミズナギドリ						
カワウ						○
ウミウ	○	○	○	○	○	○
ヒメウ	○	○	○	○	○	
アオサギ					○	
マガン						○
マガモ						○
カルガモ			○			
コガモ						○
ヨシガモ			○			
ヒドリガモ	○	○	○			○
オナガガモ						○
キンクロハジロ	○			○		○
スズガモ	○	○	○	○	○	○
クロガモ	○	○	○	○	○	○
ビロードキンクロ	○	○	○	○	○	○
シノリガモ			○		○	
コオリガモ	○	○	○	○	○	○
ホオジロガモ	○	○	○	○	○	
ウミアイサ	○				○	○
カワアイサ			○			
トビ	○	○	○	○	○	○
オジロワシ		○	○	○		○
ハイタカ						○
ケアシノスリ					○	
ノスリ						○
ハヤブサ						○
オオセグロカモメ	○	○	○	○	○	○
ワシカモメ	○	○			○	○
シロカモメ	○	○	○			○
カモメ	○	○	○	○	○	○
ミツユビカモメ				○		
ハシブトウミガラス	○	○	○	○	○	
ケイマフリ			○			
マダラウミスズメ				○		
ウミスズメ	○	○		○		○
カンムリウミスズメ						
エトロフウミスズメ			○		○	
コウミスズメ	○	○	○	○	○	○
ウミオウム	○					
ウトウ				○		
ハクセキレイ					○	○
カササギ		○			○	
ハシボソガラス		○	○	○	○	○
ハシブトガラス		○		○	○	○
シメ						○

哺乳類	2010/2/21	2011/1/15	2011/2/20	2011/12/17	2012/2/19	2013/3/17
ネズミイルカ	○					○
イシイルカ						○
オットセイ			○		○	



写真1 水面を走るコウミスズメ

冬の海鳥ウォッチングの本命

冬の勇払クルーズの本命はエトロフウミスズメです。エトロフウミスズメは、特徴的な冠羽を持つユニークな外見の小型ウミスズメです。しかし、チャームポイントである冠羽は離れていると見えにくいいため、この鳥を遠くからを見つけるには、飛翔時の姿が下面まで黒く見えることを識別ポイントとしていました。そのため、私は彼らを“まっくろくろすけ”と呼んでいました。

エトロフウミスズメは、道東でよく見ることができ、時に大群で見られます。そのため、勇払クルーズも当該種の大群を見ることが冬期の目標になりました。しかし、大群といえども広大な勇払の沖をあてもなく探すのは無謀なことです。まずは、エトロフウミスズメが出てくる可能性のある海域まで船を進めました。その道中もコウミスズメが飛び出してきました。目標海域は、勇払マリーナから30km程度沖に出た水深100mライン。ここは外洋性の海鳥が見られる海域として実績があり、毎回行きたい場所ですが、海況がよくなければ到達することができません。その海域でエトロフウミスズメと出会うことができました。

初めての観察は、2011年2月20日で

した。この日も私たちはコウミスズメとの交流を楽しみながら、水深100mラインを目指しました。「まっくろくろすけ」出ておいで」と願いながら、船を進めます。そして、水深100m前後のところで下面も真っ黒なウミスズメ類が3羽飛び出しました。「とったー！」（写真2）。これが私の目指していた“まっくろくろすけ”との初対面でした。エトロフウミスズメのあの特徴的な冠羽を目に焼き付けたかったのですが、そのまま遠くまで飛びさりロストしたため、アプローチできませんでした。それでも冬の勇払クルーズでエトロフウミスズメが出ることを示した貴重なデータとなりました。この時の航路を図1に示します。



写真2 飛び去るエトロフウミスズメ

エトロフウミスズメのその後の記録は、2012年2月19日があります。しかし、私の印象にはあまり残っていませんでした。当時のメモには「エトロフウミスズメ1羽先崎理確認」とあります。彼が飛んでいるエトロフウミスズメを確認し、その声につられ私も探したけれど捉えることができなかったのだと思います。



図1 2011年2月20日の航路とウミスズメ類が確認された主な地点

冬だけじゃない“まっくろくろすけ”

私とエトロフウミスズメの初対面がなかったあの日（2011年2月20日）、私たちが水深100mラインを目指したのは理由がありました。勇払クルーズでエトロフウミスズメを初めて記録したのは、実を言うと冬のクルーズではなかったのです。2010年5月26日に実施した勇払クルーズで水深100mライン付近の潮目で確認したヒレアシシギの大群の中にエトロフウミスズメがまぎれていました（写真3）。現場では誰も気づくことができず、参加者の撮影した写真の中に飛翔する“まっくろくろすけ”の姿を確認し、勇払クルーズにおけるエトロフウミスズメの初記録となりました。これにより冬期にエトロフウミスズメの群を見つけようという気運が生まれたのでした。そのため、冬100mラインに到達できれば、エトロフウミスズメに

出会うのではないかと考えて、冬のクルーズで沿岸から約30kmの沖を目指していました。

最初に出ていたレアもの

勇払クルーズの初めての冬期の開催は、2010年2月21日でした。冬の北海道の海でウォッチングクルーズなんてできるのかと不安でしたが、この時もコウミスズメが見られたことで、冬にしか見られない海鳥が見られるという確信に変わりました。さらに、後日参加者が撮影した写真にウミオウムが写っていたことがわかり、勇払クルーズの出現種リストに記録されました。ウミオウムの出現記録は、結局1回きりでしたが、初めての冬期の海鳥ウォッチングクルーズでレアものであるウミオウムを観察できるということでこの季節の海鳥ウォッチングの機運を高めることに一役買ってくれました。



写真3 ヒレアシシギ類の群に紛れて飛翔するエトロフウミスズウメ（撮影：田中哲郎）
赤丸がエトロフウミスズウメと考えられる個体。

冬のクルーズで残した課題

冬期の勇払クルーズは、エトロフウミスズウメの大群の観察が一つの目標でしたが、結局私は一度も見る事ができていません。私の中での北海道の海鳥ウォッチングでやり残したことの一つに挙げられます。それでも北海道を離れた後、小型船舶免許を取得して、銚子で自分の操船する船で海鳥ウォッチングクルーズを開催しました（南波2019a）が、新型コロナウイルスの流行もきっかけに開催しなくなっていました。しかし、また自力での海鳥ウォッチングクルーズを行いたいとこの記事を書きながら思っているところです。冬の自力での勇払クルーズは最もハードルの高いものになるだろうと思いますが、やり残しの清算のためにいつかチャレンジしたい企画です。

引用文献

- 南波興之 2018 勇払クルーズにおけるマダラウミスズメの観察記録と過去の繁殖の可能性。北の海鳥 7:6-12.
- 南波興之 2019a 勇払クルーズにおけるアホウドリ類の観察とその後の個人的観察状況—北海道～銚子～そして小笠原をめぐる足環物語—。北の海鳥 8:12-21.
- 南波興之 2019b クルーズと鳥キチ。北の海鳥 9:10-13.
- 南波興之 2020 自分の操船で勇払クルーズ。北の海鳥 10:18-21.
- 南波興之 2022 勇払クルーズにおけるウミガラス類の観察記録。北の海鳥 14:10-12.

フェリー非就航期の天売航路に
おける海鳥の観察記録
当会広報 矢萩 樹

はじめに

北海道北西部の日本海に浮かぶ天売島は、世界有数の海鳥繁殖地として知られています。通常、天売島を訪れるためには羽幌港を発着する天売航路を利用します。この航路も海鳥ファンにとっては魅力的で、島で繁殖するケイマフリやウトウに加え、渡り時期にはハシジロアビやウミガラス属、コウミスズメなどの海鳥が多数出現する航路として知られています。

天売航路では、フェリーと高速船の2隻が運行しています（羽幌沿海フェリーonline）。前者は15ノット（時速約28km）程の速度で航行するため海鳥観察に適していますが、後者は23ノット（時速約43km）の高速で航行するため、海鳥観察には不向きです。フェリーは、時期によって便数が異なるものの通年で運行しています。しかし、毎年4月中旬から下旬の約20日間は定期点検に入るため、この期間に限ってフェリーは運休となり、高速船のみの運行となります。したがって、4月のほとんどは航路での海鳥を十分に観察することができないため、本航路における海鳥情報の空白期間となっていました。

フェリーが定期点検で運休中の際、高速船で運搬できない水産物や生活物資などの貨物は、筆者の義父が、所有する漁船でフェリーに代わって運搬しています。筆者は2022年にこの船に乗船し、貨物の積載・荷揚げを手伝う傍ら、往復の航路で海鳥を観察する機会を得ました。フェリー航路とは若干異なるルートを航行しましたが、本海域における海鳥観察が困難な期間の記録と思われるので、観察結果を報告したい

と思います。

大漁のミスダコ

乗船したのは、2022年4月10日と4月16日の2日間です。両日とも羽幌港と天売港を往復する船の右舷から、観察範囲を設けず目視可能な範囲の海鳥を観察しました（図1）。4月16日には、天売港の堤防で待っていた数百キロのミスダコが大きな袋に入れられ、フォークリフトに吊られながら船に積み込まれました。袋が揺れないよう船上で押さえるのですが、袋から漏れてくる粘質性の高い「タコ汁」を頭から浴びることに……。他にもニシンやシマゾイなどが数多く積み込まれました。この日は、これらの貨物の整理に時間を要したため、天売→焼尻間での海鳥観察はできませんでした。

ウトウが主要種

2日間の観察により、ウトウ、ウミスズメ、ヒメウ、セグロカモメなど18種の海鳥が記録されました（表1、図2）。中でも個体数が多かった種はウトウで、全体の約74.94%（1,157個体）を占めました。単独から350個体ほどの群れで確認され、大部分が着水個体でした。おそらく、天売島の繁殖個体群が周辺海域で過ごしているのでしょう。また、嘴を擦り合わせる求愛と思われる行動も観察されました。このような行動は繁殖地から離れた海上でも見られるようです（千嶋2014）。

次に個体数が多かった種はウミスズメで、全体の約7.45%（115個体）を占めました。5個体から50個体ほどの群れで確認され、大部分が着水個体でした。ウトウとは異なり、確認されたのは4月10日の復路のみで、移動中の群れであったことが推察されます。天売航路における過去のセンサス調査では、4月7日に113個体、6

月7日に102個体のウミスズメが記録されており（長谷部真 未発表）、本記録が過去最大個体数と思われます。また、利礼航路においても4月中旬に北上中の個体が観

察されており（杉村 2004）、北海道北西部においては、この時期にまとまった群れが通過しているのかもしれませんが。

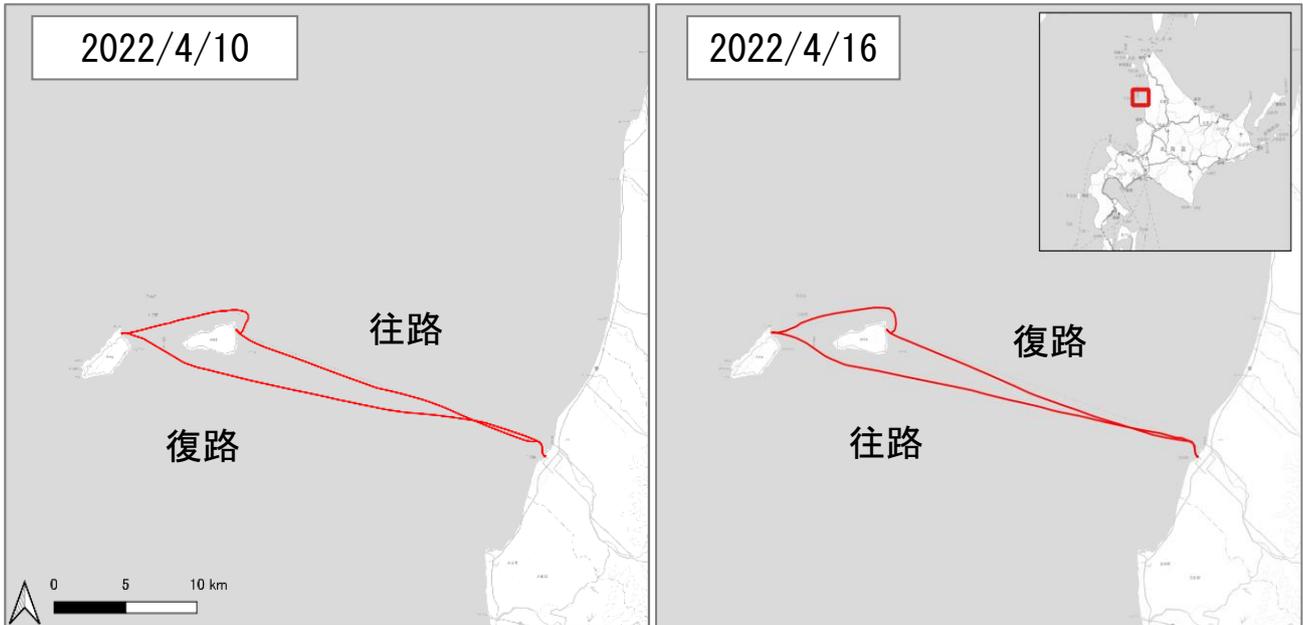


図 1. 観察航路

ウミガラスは記録されず

天売航路では、ウミガラス保護増殖事業の一環として、ウミガラスの渡り時期を特定するための調査が実施されました（環境省北海道地方環境事務所 2013, 2014）。本種の渡り時期を特定し、天売島の繁殖地への誘引適期を検討するためです。この調査によって、ウミガラスは11月から4月に本海域で記録され、4月上旬以降は見られなくなることがわかっています。特に、2012年3月28日には1,011個体ものウミガラス類が記録されました（環境省北海道地方環境事務所 2013, 長谷部 2022）。しかし、4月中旬から下旬までは、フェリーの運休により未調査となっていました。

今回の観察では、ウミガラス類は記録されませんでした。この結果から、4月中旬から下旬はおそらく本種の主要な渡り時期ではないことが推測されます。利礼航路でもウミガラス類の渡りの最盛期は3月下旬とされており（杉村 2004）、北海道北西部における本種の渡り時期はこの頃なのでしょう。

おわりに

今回は、たった2回の航海記録でしたが、これまで海鳥観察が困難であった期間における天売航路の海鳥をご紹介しました。今後も機会があれば本海域における海鳥を観察したいと思います。

表 1. フェリー非就航期の天売航路で観察された海鳥

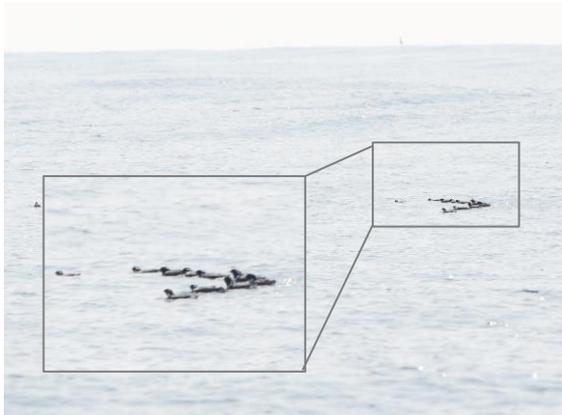
種名	2022/4/10		2022/4/16		合計	相対優占度
	羽幌→天売	天売→羽幌	羽幌→天売	焼尻→羽幌		
シノリガモ <i>Histrionicus histrionicus</i>		2	4		6	0.39%
ビロードキンクロ <i>Melanitta fusca</i>	4				4	0.26%
ウミアイサ <i>Mergus serrator</i>	4				4	0.26%
アカエリカイツブリ <i>Podiceps grisegena</i>	18				18	1.17%
アビ <i>Gavia stellata</i>	1				1	0.06%
シロエリオオハム <i>Gavia pacifica</i>		1			1	0.06%
アビ属の一種 <i>Gavia</i> sp.		1			1	0.06%
ハイイロミズナギドリ <i>Puffinus griseus</i>		1			1	0.06%
ヒメウ <i>Phalacrocorax pelagicus</i>	26	32	12		70	4.53%
ウミウ <i>Phalacrocorax capillatus</i>	4	1	10		15	0.97%
ウ属の一種 <i>Phalacrocorax</i> sp.		1			1	0.06%
ミツユビカモメ <i>Rissa tridactyla</i>	1	1			2	0.13%
ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	8	9	4	5	26	1.68%
カモメ <i>Larus canus</i>		9	8	6	23	1.49%
シロカモメ <i>Larus hyperboreus</i>	1	1	2		4	0.26%
セグロカモメ <i>Larus argentatus</i>	5	6	18	4	33	2.14%
オオセグロカモメ <i>Larus schistisagus</i>	7	5	8	4	24	1.55%
カモメ属の一種 <i>Larus</i> sp.			32		32	2.07%
ケイマフリ <i>Cephus carbo</i>	1	2	2	1	6	0.39%
ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i>		115			115	7.45%
ウトウ <i>Cerorhinca monocerata</i>	429	450	257	21	1157	74.94%



ウトウ (2022/4/10 撮影)



求愛と思われる行動をするウトウ
(2022/4/10 撮影)



ウミスズメの群れ (2022/4/10 撮影)



ウミスズメの群れ (2022/4/10 撮影)



ヒメウ (2022/4/16 撮影)



セグロカモメ (2022/4/16 撮影)



カモメ (2022/4/10 撮影)



ケイマフリ (2022/4/16 撮影)

図2. 観察された海鳥

引用文献

千嶋淳(2014)北海道の海鳥2 ウミスズメ類②アホウドリ類. 日本野鳥の会十勝支部, 帯広.

羽幌沿海フェリー (online) 船舶案内.
<https://haboro-enkai.com/ship/> 参照 2024年1月5日.

長谷部真(2022)道北日本海に早春に出現するハシブトウミガラス集団. 北の海鳥 14: 14-19.

環境省北海道地方環境事務所(2013)平成24年度ウミガラス保護増殖事業報告書.

環境省北海道地方環境事務所(2014)平成25年度ウミガラス保護増殖事業報告書.

杉村直樹(2004)利礼航路で観察された鳥類および海生哺乳類. 利尻研究 23: 93-128.

・『北の海鳥』編集後記

今回は学生さん2名に原稿を書いてもらい、新しい海鳥調査員が育っていることを嬉しく思います。ところどころに千嶋さんの文献が引用され、その業績と影響力を改めて感じました。ここ数年は海岸から沖を観察したり、船に乗って沖合の海鳥を観察することが多いですが、北海道海鳥保全研究会の設立目的である新たな繁殖地の記事も欲しいところです。

海鳥調査の大変ながらも素晴らしいところをしてみてください。今回長谷部からは海鳥調査の記録ではなく、海鳥調査の魅力という「北の海鳥」の記事としては異質の内容になりました。前回伊藤さんの青森周辺におけるウトウの繁殖地の写真を見て、『この風景がいいんだよなあ』とかつて海鳥調査をしていたときのことを思い出しました。そして、海鳥調査の最大の魅力は無人島をはじめとする海鳥繁殖地で調査することではないかと。それならば、大学の先生でもないの大きなお世話かもしれませんが、他の海鳥観察も含めてこれから海鳥の世界に入ろうとする学生さんの参考になるように、これまでのことを思い出しながら、記事を書いてみることにしました。

石橋さんからは納沙布沖でのエトロフウミスズメの群れの貴重な観察記録でした。霧の中での観察の際のわくわく感が伝わってきました。2日連続でクルーズ船に乗船しようとし、船が欠航しても陸上から観察することに海鳥に対する熱い想いを感じました。

及川さんからは襟裳岬からの海鳥観察記録でした。襟裳岬からはこれまであまり海鳥観察の記録が報告されていなかったと思いますが、さすが北海道の隅っこだけあり期待以上にたくさん出ているようでした。襟裳岬は帯広からでも決して近い場所ではないですが、季節ごとに出現海鳥の特徴がであり、大変貴重な記録でした。

納沙布でエトロフウミスズメの話が出たのと襟裳岬での記事があったので、南波さんには比較的近くの『勇払クルーズ』におけるエトロフウミスズメや他のウミスズメ類について記事をお願いしました。寒い冬の長時間調査には頭が下がります。勇払沖でも例に漏れず多くの海鳥が出ていることがわかりました。特にウミオウムが出たことはとても羨ましく思います。今後勇払クルーズをぜひ再開してほしいです。

矢萩さんからは羽幌天売のフェリーが就

航していない期間の漁船による海鳥観察記録の記事でした。フェリーがドックに入るため羽幌の港からいなくなる4月上旬から下旬までの時期は海鳥を観察するのに絶好の時期であり、または海鳥相が大きく変化する時期でもあるため、この期間にフェリーがないことをとても残念に思っていました。本記事はその盲点を突いた貴重な記録です。今後も矢萩さんが羽幌周辺の海鳥の記録を明らかにしてくれることを期待します。

本号は2024年の2月に発行する予定でしたが、3月にまで遅れたことをお詫び

します。会報誌の次号は2024年の9月頃に予定通り発行したいのです。次号の原稿の執筆は長谷部までお願いします。

hasebemakoto@hotmail.com

北海道海鳥保全研究会は現在ほぼ会報誌の発行だけが活動となっています。「北の海鳥」は私、長谷部と事務局長の先崎さん、広報担当の矢萩さんの3名で運営しています。原稿の細かい部分まで確認していますがよりよい会報誌にするためですので、面倒をおかけしますがご理解の程よろしくお願ひします。

北海道海鳥保全研究会 編
会報誌 北の海鳥第十八号
発行日 令和6年3月12日
発行所 北海道稚内市5-27-8